

<柳父 章氏インタビュー>

未知不可解の出会いから翻訳がはじまる

本稿は『翻訳語の論理』（法政大学出版局）、『翻訳語成立事情』（岩波書店）など翻訳に関する多数の著書で知られる柳父章氏へのインタビューである。近代日本と翻訳という観点から独自の翻訳論を展開してこられた氏に、その研究の原点から今後の展望までを縦横無尽に語っていただいた。

1. 研究の原点

— ご専門の翻訳論に興味をお持ちになったのは、どのようなことからでしょうか。日本語の問題から入られたのですか。それとも文学からですか。

柳父： 文学ではないですね。文学部にいたことが多く、小説をテーマに扱うことは多かったですし、現在も比較文学会に属しています。それで文学に出てくる、たとえば「彼」という言葉を取り上げて論じたりしています。でも僕のやっていることは文学とは感じが違うみたいですね。むしろ文化論。

— きっかけというか、いま先生がやっておられる研究の原点みたいなものは何でしょうか。

柳父： 子どものころ本を読んでいてわからなかった。誰にも教わらずに本を読んでいたんですよ、小学校に上がる前にね。考えてみると誰にも教わっていないのですけれども。それで勝手な読み方をしていた。自叙伝なんか見るとそういう人いるみたい。勝手な読み

方ですからね、わからないところが随所に出てくる。特にわからない言葉は引っかかりながら、でも引っかかることが重要で、そのなかで特に漢字 2 字の単語がわからなかった。それがずっと引っかかっていたということをおい出します。結局それは翻訳語だからだということに気づいたのは、ずっと後ですが。

— それが翻訳語であると気づかれたのは、いつぐらいですか。

柳父： 20 歳過ぎてからです。学校に行く前から漢字を飛ばしながらではなく、自分なりの解釈をして読んでいましたが、ずいぶん勝手な解釈をしていましたね。幼い頃の記憶に漢字が出てくるということは、子どもの本だけではなくて、週刊誌とか親父の本棚にあった本だとか、何でも。本好きな子は活字だったら何でも読んでしまうでしょ。僕もそんな子どもでした。

2. 近代日本とポストコロニアリズム

— 以前柳父先生が、ポストコロニアリズムのお話をされたとき¹に、ニランジャナ²の

absentee colonialism「支配者なき植民地主義」のことに言及されたのが印象に残っています。日本の状況も踏まえて、ニランジャンナのお話をされたのですか。

柳父： インドの人たちは一方で植民者の英国文化の伝統をよく受け継いでいると同時に、それを批判する傾向があります。思想的にはデリダの影響を受けています。マンディ³のなかで紹介していますね。これは本当によくできた本で、いろいろな学説を紹介しながら、ニランジャンナもちょっと出てきます。それで僕も興味を持ってニランジャンナを探して、ようやく最近この人の本を手に入れました。

— この辺りの話と先生のご興味との関係というのは、やはり日本の状況を見ると、同じような absentee colonialism という考え方と関連があるのではということですか、日本近代以降の翻訳の状況という点で。それとも少し違う角度からでしょうか。

柳父： 日本には植民地支配者はいなかった。植民地支配者なしに翻訳がはじまっています。少数のお雇い外国人なんかはいましたけれども、翻訳の中心は日本人でしょう。その日本人があらゆる学問において、文学を含めて、結局のところ西洋崇拝ですね。鴎外、漱石にしても。ただ、それと一方で日本の文化伝統がありました。文体にしても、日本語の文体というものが近代直前まで伝統があって、それを引き継いでいる。その伝統の上に立って、具体的にいえば蘭学の系譜、それをさらに遡れば漢文訓読の文体のような歴史、漢文訓読から蘭文訓読へそしてさらに英文訓読へという、ある賢明な処理のしかたを作ってきている。だから翻訳した人たちも、一方的に西洋

崇拝というのではなくて、自分たちの文化伝統を受け継いでいるという意識もとても強かったと思いますね。たとえば、鴎外などは見方によれば本当に翻訳調の文章で翻訳をやったけれども、自分の文体は日本語のしっかりした文体であると自信をもっていたし、そのように評価もされています。ああいう画期的な日本文を作り出すことができたという面もあります。

— 日本の近代に入ってきた言葉や文体が、一種のコロニアリズムのなかで確立したということですか。

柳父： 分野にも、人にもよるのですが、確かにコロニアリズムという面があるわけで、それは特にテクニカルターム、造語、それから僕の著作⁴でも論じていますが、「大日本帝国憲法」のような文体もそうです。

3. 日本語独自の翻訳論

— 現在、広義のトランスレーション・スタディーズは西洋語同士のペアを中心に論じられるわけですが、日本語とのペアを考えるとまた違ったものになると思います。日本語とのペアの独自性を考えると、近代に入ってきた翻訳語の問題を含めてどのような視点が有効なのでしょうか。

柳父： トランスレーション・スタディーズで扱っている問題は西洋語のなかの組み合わせ、たとえば英語とフランス語とかの組合せで、翻訳の問題を扱っているものが圧倒的に多い。それに対して、日本語と西洋語というのは本当に違いますからね。われわれはそれに直面しているから、問題はずいぶん違っていると

思います。だから、それは西洋語でも日本語でもない、第3の言葉ということになるという理論付けをしないと捉えられないような、そういう見方もあると思うのです。西洋人にしてみればラテン系の言葉同士で考えていますから、チョムスキーの理論にしても、トランスレーション・スタディーズの理論家たちも。ナイダ⁵も結局そうですね。ナイダの場合はやはり背景はキリスト教ですから、神の言葉は必ず伝わるはずだという信条もあるのでしょうか。

4. 言葉とカセット効果

— 先生が提唱されている「カセット効果」に関連することなのですが、カタカナ語も含めて、輸入された新しい言葉が入ってきたことによる一種の乱れのようなものが、先生の言葉では、「病理」ではなくふつうの言葉の「生理現象」だとおっしゃっておられますね⁶。言葉とは、本来いろいろなものが入ってきて一見乱れながら進化していくという性質を持っているのだということですか。

柳父： 言葉とは本来そういうものだと思います。あるいは西洋の学問と東洋の文化伝統の違いがあるかもしれません。われわれの文化はアニミズム的な、至る所にわからないものがあって、それが大事だという文化伝統があります。村には村はずれという未知なる空間があったし、それは人間関係にも及んでいて、「あうんの呼吸」といえば、誰もわからないのだけれど、承知してしまう、ああそういうものかと思ってしまうようなところにまで及んでいる。また、たとえば道教とか、わからないものを大事にする文化伝統というものがあって、それが現在にもいろいろな形で、

人間関係にも生きている。西洋の合理主義ではそれは絶対に許されない。日本にはそういう文化伝統があるという違いがあるかもしれませんね。

— そういう文化的な違いという話になると、よく日本語は動詞中心で西洋語は名詞中心だといわれます。日本近代に入ってきた言葉は名詞が中心であるともいわれます。ただ、西洋においても、西洋の近代思想のなかでそのような名詞ができてきたともいえるし、日本語に名詞が乏しかったというよりも、西洋においても近代的な西洋の枠組みでの話ではないのかという気がします。名詞構文と動詞構文、西洋と日本という二元論だけでなく、西洋にも二つの側面があるのではないかと思います。いかがですか。

柳父： そうですね、近代化のなかで日本が取り入れたのは近代西洋です。近代西洋を作り、近代西洋文化をつくってきたという伝統、われわれが受けとったのはそういう近代の西洋です。特に大学で教える学問用語というのは名詞を中心に組み立てられているわけですね。概念としての名詞です。

5. 翻訳文化論

— $A + B \rightarrow C$ という先生の翻訳文化論について、少しお聞かせください。

柳父： 翻訳とはAとBの両方を見ながらいわばその中間を作っていく、忠実にもしくは正確に言葉を選んで翻訳すると考えられますけれども、実は第3の言葉を作っているのではないかという、AでもBでもない言葉を作っていくということをいってきました。ト

ランスレーション・スタディーズの一部の人たちはそれに近いことをいっているような気がします。スタイナー⁷はその代表で、彼の *strangeness* の概念とか、あとはヴェヌーティ⁸とか。ただ、どちらでもない言葉なんてできるわけがない、それは得体の知れない言葉だということで、僕はそれを「カセット効果」と名付けました。つまり翻訳というのはわからないというところからはじまる。翻訳者だけでなく読者一般の立場を僕は重視したいのですが、読者の目の前に現れてきたのは果たして日本語なのか、と思われるような言葉ではないのかと考えます。また翻訳者の方も、完全に言語を理解しているとしても、それも第一にむつかしいのですが、たとえそれができたとしても、それを日本語として表現できているのかということに必ずしも自信を持っていないのではないかと思うのです。それは翻訳者の立場からランスレーション・スタディーズの人たちもいっていますけれど、そこには一種の飛躍があるとか、あるいはスタイナーなどは少し神秘的な表現を使っているのですが、僕は言葉とはわからないところからはじまるのではないかと考えます。完全にわかっているという前提からはじまると、こちらかあちらかということになりますけれど、言葉とはわからないところからはじまるものだ、これが僕の主張です。そして、日本の翻訳は特にそうだといいたいのです。わからないところからはじまる、と。たとえば、言葉を覚える時、赤ちゃんは完全にわかってから覚えるわけではなくて、徐々に慣れていく、自分なりの意味を付け加えていく、という観点ですね。翻訳という新しい文体が出現した時に受け取る人たち、そしてそれを作り出す人たちも自分が作り出した言葉でありながら、それに完全に自信をもっていたわけではない

のです。どこかに未解決の部分を残してある。読者にとっては一層そうです。学問、思想、芸術などの用語で、近代日本を作ってきた重要な言葉に焦点を当てると、わからないところからはじまっていたといえます。わからない未知不可解からはじまる、という理解のしかた、これは科学的でないような感じがしてあまり理解してもらえないのですが、僕は一貫してそれを考えています。時々海外の人から「きみの翻訳論は？」と聞かれて、そういう風に答えるとなかなかわかってもらえない。西洋の学問は完全にわかったところからはじめるような学問ですから。それに対して、わからないところからはじまったというのが、僕の持論。翻訳理論家でそういう種類の言葉を使う人たちもいますね。 *foreignizing* とか、 *strangeness* とか。

6. 理念としての異化と現実の翻訳者

— おっしゃることは理念的にはわかるのですが、たとえば、いまの日本の出版翻訳の状況を見てみたらどうでしょうか。 *foreignizing* (異質化) されている翻訳というのは読者には受け入れられません。言葉を *foreignizing* して更新して新しいものをつくるということは理念的には理解できるのですが、一方で現実的にいまの読者が嫌う翻訳調との区別がつけにくい。

柳父： それは非常に現代的な問題ではないですか。いま若い読者がわかりにくい文章を受け付けなくなっている。

— わかりにくいというのが理念的にわかりにくいということと、いわゆる翻訳調でわかりにくいということとは違うのではないです

か。

柳父： それも含めて、いま翻訳が変わっているでしょ。わかりやすい翻訳をどんどん出すようになってきているでしょ。いままでのオーソドックスな翻訳を出していたところはそれを嫌っていた。大先生の名訳はそんなものではないかという意識がとても強かったし、いまでも、たぶん強いと思う。それに対して時代が動いている。動いている時代という背景があるのではないですか。

－ わかりやすさという点で読者に迎合しているわけではなく、翻訳者の技術が高まったという見方もできませんか。理念として、**foreignizing** というのはわかりますが、未熟な翻訳調と言語や思想の新しさという理念的な部分とを混同すると、実践と理論のギャップというのがどうもその辺にあるような気がします。

柳父： 外国語ですから、**foreign language** ですから、当然わからない部分、**foreign** な部分はあるはずですが、そのわからなさを重要視する意見がトランスレーション・スタディーズにもあるし、僕の意見もそうなのです。

－ 最近の新訳では、**foreignizing** しなくてわかりやすくしたというよりは、無駄に異質な部分を排除しているのではないのでしょうか。その辺はどうでしょうか、理念としての異質性と翻訳実務技術としての無用の **foreignizing** とは、違いますよね。

柳父： それはそうですね。だけどやっぱり、**foreign** な部分は残るでしょう。

－ 翻訳された新しい言葉や文体が、日本語のなかでふつうの人たちが使う言葉にも影響を与える。それとは別に、翻訳文化のなかで学術書などの翻訳されたものは読みづらいが、それでもいいという規範もかつてあった。しかし、現代的な翻訳規範はそうではない。その根底には西洋との文化的な距離が縮まったという考え方もできますか。

柳父： 西洋との距離が必ずしも縮まったといえるのでしょうか。たとえば「社会」という言葉を使って、学術、法律の文章を作ると同じように、翻訳と原文と対応できるような文が作られていくんだけれども、詳しく見ていくと、近代以後、日本が作った歴史がそこにこめられていて、それは西洋の言語がもってきた歴史とはどこかずれていることがある。だから、たとえば民主主義といっても、「あうんの呼吸」で解決がつく民主主義もあれば、徹底的な話し合いの民主主義もあるという違いは出てくると思います。だから近代日本の翻訳語や翻訳文体の作ってきた文化はやっぱり西洋と必ずしも完全に一致する方向ではない。ずれているといえばずれているけれども、それなりの日本文化を作ってきたのではないかと思います。

－ 翻訳なのでふつうの日本語ではないということについては、実務の翻訳技術の部分と、西洋から入ってきた新しい文体の新しい思想を翻訳が日本語のなかに作ってきたという理念的なレベルと分ける必要はありませんか。いわゆる大先生が作ったわかりづらい翻訳調の文体は、新しい思想が入っていたからわかりづらいのか、単にそれを読者が我慢して読んでいたというそういうレベルの話と。あくまでも理念は理念として新しく、翻訳が何か

を作っていく、更新するという部分を入れながら、実践としては無用な異質化は排除する。逆に無用な foreignizing があると新しい理念が読者に伝わらないのではないですか。

柳父： そういう 2 つの面はあると思いますね。それがいま反省期に入っている。あなたは無用な foreignizing な本を読んだ世代？ そういうのをありがたがったことありますか。

— はい、ありますね、そういう体験。

柳父： バタ臭さにあこがれるとか、舶来崇拜とかね。悪い意味でも使いますが、そういうものがずっとあって日本の近代化はやってきた。僕は子供の頃まだ戦争中だったけれど、スイスのチョコレート箱、忘れないですね。憧れの世界がここにあると思って。

7. 英語と日本語の文法

— ところで、先生のころは英文法も含めて、どんな語学の授業を受けられたのですか。

柳父： 文法の教科書があって、中学、高校、大学と文法というのをやっていたね。それに日本語の文法も。三上章⁹は、「日本語の文法書は英語の文法書の翻訳である」って批判しましたね。それで変わりました。三上章の批判もあって、日本語文法もある程度変わってきましたね。

— おそらく三上章に批判されてきたような人たちがやってきた日本語文法というのは、翻訳から学んだ文体で作例をしたのではないのでしょうか。そうすれば、西洋の文法理論を簡単に日本語に適用できる。日本語でも英語

文法に合うような例ができてしまう。作例すれば主語を入れることもできるわけですから。

柳父： そうですね。

8. 日本における翻訳研究の展望

— 翻訳研究はやはり学際分野なので、いろいろな学問分野、たとえば文学、言語学、人類学、社会学、心理学をはじめ、最近では PC に装置をつけて目の動きでリアリティを追うというような翻訳プロセスの研究もあるくらい幅広いし、通訳研究でもこれまでの情報処理理論や認知科学的な研究にくわえて、通訳者が仲介することで場面がどう変わるのかという社会学的な論考など本当に広い分野にわたっています。どこから入っていいのかわかってしまうくらいです。先生は翻訳を研究するにあたってどんな視点が、今後開けてくるとお考えですか。

柳父： 翻訳論はこれまで大学であまり需要はなかったですね。比較文化論というのは比較的どこの大学にもあって、実際に実務の要請があるみたいですが。たとえば、日本のセールスマンとアメリカのセールスマンが話をすると、一番多い話題が比較文化論だって、冗談でそういうくらい。そういうことを知っているのと役に立つという実利面があるみたいですね。漠然とした期待があってそういう分野はいろんな大学で教えていますよね。だけど、そういう比較文化論も「文化の基本構造は言葉である」という前提でやるといういろんなことがわかるのではないかという思いでやってきました。いままで翻訳論の需要が日本になかったっていうのは、どういう視点から研究するのかというアプローチがなかったとい

うことではないのでしょうか。具体的に翻訳をするという実務という視点のみで。やはり近代以後の日本という問題意識、つまり西洋をモデルにしてやってきて、やり続けているという、それがどこまで成功しているのかというような、そういう漠然とした問題意識が僕のなかにはいつもあります。結局問題を考える時には「言葉に立ち戻るとわかる」という、そういう信念みたいなものが僕にはあって、だから言葉の問題から入るんです。それで言葉の問題でわかんないときには文化の問題から考えるということもありますけれども、日常の事件から政治や文化に至るまで、言葉に立ち戻って考えると、ああそうかとわかることが多い。で、言葉の問題というのは、日本近代の問題としては、やはり翻訳、翻訳に立ち戻る、翻訳という素性から来ている問題が多いということですね。

9. 翻訳者へのまなざし

— 誰が翻訳をしているのかという、翻訳者という人たちに焦点を当てると、過去には大学の先生がしてきました。職業としての翻訳者が成立したのは、比較的新しいと思います。その辺の役割の変化というのは、柳父先生はどのようにみとられるのですか。職業としての翻訳者がどの程度成立しているのかという点はまた別の問題かもしれませんが。

柳父： 一部の翻訳者を除いて、一般には翻訳者の社会的地位というのはない。だから学者という肩書きがあればそれで信用されて本が売れた。それ以外ではなかなか社会的地位がなかったのは、ヨーロッパでもそうみたいです。けれども、学者が翻訳するというのが日本の特徴みたいですね。たとえば、翻訳理

論でよく問題になるのは、英語圏を中心として、transparent（透明）な翻訳という点です。要するに翻訳であることがわからないのが大事にされてきましたが、やがてそれに対する批判も起こってきた。それがデリダの批判であり、ニランジャンナにもつながるポストコロニアリズム。だから翻訳者というものが姿を見せないというのは、西洋でそうだったんです。日本では翻訳というのは学者がやっていたから、否応なしに正面に出てくる。これはやはり後進国の特徴でしょう。つまり、後進国というのは文化的に近代以後西洋文化をありがたく受け入れてきたという意味です。読者も学者の訳でないと思わないという、それが最近になってちょっと変わってきたかと思いますが、まだまだです。

— では西洋での思想的潮流とは逆に、日本では現在、「翻訳者透明論」の方に傾いているということですか。学者という肩書き以外の翻訳者が訳しているという意味で。

柳父： 透明になっていなかったんですよ、いままでが。ヨーロッパやアメリカでは透明な翻訳文体というのが理想とされてきて、事実透明性のなかに翻訳者が隠れていたという伝統があったけれども、日本はそうじゃなかった。日本でごく最近はじまった翻訳の変化が、いわゆる透明な文体に近いのかしら。まだ新訳をよく読んでいないから、批評はできないのですけれど、おもしろい現象ですね。どうでしょう、これからでしょうね、十分可能性はあるし、これから広まっていくでしょう。ただ障害もあるでしょうね。学術用語とか、経済学でも法律でも、いままで翻訳語で考えてきましたから。そういうところとの衝突が来る。その抵抗は、ひとつは役人。官庁

用語ね。法律っていうのは官庁が握っているという意識がありますから。定義を与えているんですよ、その訳語にね。訳語が違ってくると定義が違ってくるというので反対、ということでテクニカルタームは自分たちの与えた定義で自由に扱いたいという、そういう意識がある。それは僕も直接ぶつかりましたけれど。なるほど役人が翻訳語を取り締まっているということに直面したことがかつてありました。それによって権力を握っているのだということとそのとき感じましたね。そういう例は至る所にあると思います。役人もそうですが、もちろん学者もそうです。学者と役人が近代日本を創ってきた中心ですからね。ところで、日本では翻訳書というのはおもしろいから読むのでしょうか。

— 日本語で書かれたものと同じようにおもしろいからという理由で読めたら理想的だと思います。英語だったら読める人も結構いるわけですから、翻訳書に何らかのメリットがないと。

柳父： それは翻訳の方が速く読めるでしょう。そして、やはりバタ臭いとか、舶来崇拜でしょう。僕もよく読んだなあ、アガサ・クリスティーとか。

— では、速く読むためには無用の foreign な部分は邪魔ですよ。それが好きな人は原文を読めば、もう 100 パーセント、foreign なんですから。そういう意味では翻訳を読むという行為を考えると、わからない翻訳を無理して読むという必要はないわけですよ。

柳父： あのね、ちょっと考えにくいような気がするかもしれないけれど、学術書を翻訳

してきた人たちには、読みづらくなければならないという、変なこだわりがあったの。つまり正確さとか、原文忠実とか。本当はそんなのは全部インチキなんですけれどもね。それから読みづらさもそう。読みづらくなければ、学術的でないということ。それは英語やフランス語の原文と日本語の翻訳をつき合わせながら読むということです。対応できるという前提でね、書き下しみたいに。そう、原文忠実という意味は、漢文訓読の伝統です。

— ところで、柳父先生ご自身が翻訳されるとしたら訳してみたいものとかおありですか。これまで、時間がなくてできなかったけれど、こういうものが翻訳してみたいとか。

柳父： そういうことを思ったことはないです。

— えっ、ないんですか。この作者のこれが訳したかったけれども、忙しくてこれまでできなかったとか。

柳父： ないですね。部分的には訳読の教室で訳していましたけれど。いろんな教科書とか、あるいはルソーとか。

10. 現在の研究テーマ

— 最近先生が一番ご興味をお持ちになっていることについてお聞かせください。翻訳も含めて、何でも。

柳父： 自分の問題としては、「カセット効果が普遍的である」ということを証明したい、そう思って資料を探したりしています。広くいえば、未知不可解からはじまる言葉の理解

のしかたがある、ということです。日本では特にそういう傾向が強いけれど、それにとどまらず普遍的な言葉の理解の現象であるといいたい。そして、それを普遍的であるとして外国の人にも納得させたい。

— それは翻訳語にとどまらず、言葉一般の問題としてですか。

柳父： ええ、言葉一般の問題としてですが、やはり翻訳語から入っていきますね。「翻訳とは未知不可解からはじまるのだ」ということです。これを外国の人にも納得させるのは大変です。むつかしいだろうなあ、これは。科学的な方法とはどうしても違ってくるのではないかと思うのです。科学的な方法というのは、はっきりわかっていることを前提にしてそこから組み立てていく。ところが、僕の知っていることは、はっきりわからないことが前提にあってそこから始まるという考え方です。これは異文化と出会った経験を前提にするということで、問題解決はその後に来る。でも、科学的方法だと必ず解決法はあるはずだと、天の上から見ていますね。天の上から見て、異文化と異文化が出会ったと見ているのを説明するのが科学的だとされる。それに対し、僕らは地上にいて出会うという体験をしたのです。本当に異文化と出会ったからですよ。西洋語の体験というのは、ギリシア・ラテン語がもとにあって、そこから出ているという前提がある。われわれにとってはそういう普遍的言語に近いのが、中国語で、漢字ですが、漢字というのはすでに中国語ではなく、中国から出て行って漢字になったのです。ところで漢字が日本に入ってきたとき、漢字は格好良かったんですよ。万葉集のころ、大和言葉に漢字を当てていますよね。あれは

格好良かったからでしょう。たとえば「飛鳥」とか、ひらがなが発明されても、漢字を使いましたね。最近、訳語にカタカナ語が増えました。カタカナが多くなった説明として、原語に近くなったという見方がありますが、それはまちがいだと僕は思います。カタカナというのは西洋語ではないですからね。僕は漢字と同じという意見です。カタカナ語というのは、発音も、意味も字画も西洋語とは違う。ただ、西洋語らしさというのは残りますね。小説だったら翻訳小説らしくなるし、女の子の名前にもカタカナが多くなりました。タレントの名前も、あれは格好いいからでしょうね。

— 蛇足ですが、「カセット効果」のカセットをフランス語にしたというのは何か意味があるのですか。何かこだわりがあるのでしょうか。もしかして「宝石箱効果」でもよかったのですか。

柳父： カセット・テープというのが流行った時代がありました。いまはDVDですが、そのカセットともとは同じです。フランス語にしたというのは、……カタカナ語だからでしょうか。

(註)

1. 2006年9月の集中講義を指す。
2. Niranjana, T. (1992). *Siting Translation: History, Post-structuralism, and the Colonial Context*. Berkeley, CA: University of California Press.
3. Munday, J. (2001). *Introducing Translation Studies: Theory and Applications*. London: Routledge.

4. 柳父章 (2004). 『近代日本語の思想』法政大学出版社.
5. Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating*. Leiden: E. J. Brill.
6. 柳父章 (1976/2001). 『翻訳とはなにか』法政大学出版社.
7. Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation*. London: Oxford University Press.
8. Venuti, L. (1995). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London: Routledge.
9. 三上章 (1963). 『文法教育の革新』くろしお出版.

【インタビュー後記】

2007年11月17日、紅葉の美しい季節にご自宅でお話を伺いました。途中で赤ワインとスモークチーズもくわわり、なごやかな雰囲気でのインタビューとなりました。とても大きなテーマに関する貴重なお話のなかにも、終始笑いが混じる楽しい語らいの声が、いまでも脳裏に鮮やかに残っています。そのときの録音テープをもとに書き起こして編集・構成し、柳父章氏ご本人の承諾を得て本誌に掲載しました。

【聞き手】立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の仲間たち（長沼美香子・河原清志・斉藤美野・山田優）

【書き起こしと編集・構成】長沼美香子